様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９　～　２０１２
課題番号：２１５２００４７
研究課題名（和文）：「朱子学」の誕生―南宋後期における士大夫思想展開の発展的研究―
研究課題名（英文）：The Birth of the “Learning of *Zhu Xi's* School 朱子学”
:Study on the Development of the Thought of *Shidafu* 士大夫 in Southern Song Era

研究代表者
市來　津由彦（ICHIKI TSUYUHIKO）
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：３０１４２８９７

研究成果の概要（和文）：１．研究開始当初の背景
学説の言葉が解説の言葉として朱熹によって意識的に形成されたことの意義、また、朱熹の初伝において自分自身のための学びという思想が継承される様相を明らかにした。そして、地域に生きる士人としての朱熹の心性が学説テキストとして朱子学理論に組みこまれるしくみについて説明した。これらを併せ、朱熹思想が「朱子学」に変化する転換点を考察した。

研究成果の概要（英文）：
I made clear the meaning of the thing that the word of the theory is formed consciously as a word of the explanation by *Zhu Xi* 朱熹,and, the aspect that the idea of “Learning for Self-improvement 為己之学” was succeeded to the disciples of *Zhu Xi*. And I explained about the structure that *Zhu Xi*'s mentality as *Shi* 士, the person who lives in the local society was included into the Learning of *Zhu Xi Scool* 朱子学 as a theory textbook. These were put together, and the conversion point that *Zhu Xi*'s thought changed to the “Learning of *Zhu Xi's Scool*” was examined.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：中国哲学
科研費の分科・細目：哲学・中国哲学
キーワード：朱子学　科挙　士大夫　為己之学　民間郷里社会

１．研究開始当初の背景

中国宋代の社会・思想文化に関する日本の研究では、思想史学と社会史学とで研究の進展が並行的で、互いに交錯するまでには至っていない。一方、近年の米国では、士大夫研究、科挙研究等と思想史の動向を史学的視点から重ねた研究が進む。本研究は、こうした史学側からのアプローチの成果を吸収しつつ、主観、心性のあり方から士大夫思想の展開を追跡するという、思想史側からの融合的検討を提唱して企図したものである。

２．研究の目的

朱熹の言葉、学説は、中央政府高官レベルの人士に対してだけではなく、狭い意味での地域の民間郷里社会に生きる士人に対し、その社会的立場を客観視し自覚しつつ生きるための言葉を提供する機能するという側面を持つ。そうした朱熹の言葉、学説が、どのような展開と変容、変質を経て、南宋末に主流学術となっていくのか、地方と中央の双方において支持を受けるようになるのかを実証的に解明しようとするのが、本研究の当初の目的である。

３．研究の方法

(1)　本研究は当初、朱熹の生前から死後にかけての「朱子学」形成に関する朱熹初伝門人や再伝の人々の役割と位置に関する諸問題を検討すべく、

①　朱熹が亡くなった 1200 年時点でのその門人、交遊者の動向、その社会的立場と心性のあり方、再伝（門人の門人）への朱熹学説の説き方を抽出し、その広がりを検証する。

②　朱熹の再伝以降の人々がその思想を再生産する姿と、そのときに起こる思想の変容、及び朱子学派以外の道学系士大夫思想各学派の動向を検証する。

③　以上に加え朱熹再伝世代における科挙試験の動向を探究し、①～③を総合化する。

という手順と方法を考えた。

(2)　ところがこの科研費研究と並行する期間中に、文科省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生―」（領域代表　小島毅。平成 17-21 年度）を構成する研究班の「儒学テキストを通しての近世的思考様式の形成―日中における対照的研究」（代表　中村春作。研究班略称「日中儒学班」）に参画した。

この共同研究の中で、朱子学を代表とする中国近世儒学がその伝播においては、テキストとして読み込むべきものとして各域社会に立ち現れ、そのときにそのテキストを各域で共有しながらも、読み込む側の社会文脈から読み込み、その結果としてその学説が中国のものとは異なる働きを示すことをどう捉えるかを論議した。このことについて研究班では、中国高位文化に関わる社会文化諸現象を捉えるに際し、「中国」を自明とせず、視座として理念中国文化と実態中国社会とを仮説的に分離することを提起し、「朱子学」テキストがそういうことをまさに体現しているとみなして、『中庸』が江戸社会でどう論じられているかを検討した（『江戸儒学の中庸注釈』汲古書院、2012 年）。

本研究の企画時点（2008 年）では、基礎研究にあたる本研究とこの日中儒学班の共同研究とは別ものだったが、後者の進展に伴い、朱子学のテキストはなぜテキストとしてあるのかという根源的な疑問が浮かび上がり、朱熹が自己の思想をきわめて意識的にテキスト化して表象していることに思い至った。これは日中儒学班共同研究への参画なしには出てこなかった問題であり、また「理念中国文化（内容的には中国士大夫文化）」論は、朱子学を検討するに際して中国を中心化しない視点として、今後の研究の基軸的視座になるものである。

４．研究成果

(1)　上記「研究の方法」で述べたように、朱熹の初伝から再伝、さらに三伝へと資料検討が下っていくという当初の計画からすると、東アジアにおける思想展開を射程に置いての朱熹思想が拡がりを持つ原動力の検討に回帰して再考するというように、研究の手順と方法に変更を余儀なくされ、成果としては当初計画に比すると縮小したものになった。その新視点から、主要成果の内容と位置を解説すると、以下の通りである。

①　「朱熹の四書注釈における「解説」的言辞の特質とその形成（※中国語：朱熹四書集注中解説語措詞的形成）」では、身体的振る舞いを通して「わかる」ことや、形而上学的諸問題を、言葉を説明的に用いざるを得ない注釈という場を利用して「説明」の言葉の上に位置づけることができたことが、朱熹の学術が広範な支持者を得る基礎となったことを指摘し、いつ頃どのようにしてそうしたことが朱熹において可能となったのかについて考察した。テキスト化というこのことが、初伝、再伝の人士に朱熹思想が拡がる根本要因として存する。

②　「朱熹門人従其師那里得到了什麼―黄榦所“表象”的学習」では、朱熹の女婿で朱熹学説の継承と再生産に重要な位置を占める黄榦が書いた行状、墓誌銘における「学び」の表象を、朱熹の思想・学術の再生産の状況を考える材料とみて検討した。そこには、科挙不合格者、断念者が民間郷里社会において学びを説いて周囲の人々を感化させる場面が描かれ、そうした人が民間郷里社会のすそ野へ向けて、社会の倫理秩序を構成する人の「知」力を拡大させる現象がみられる。13 世紀後半までで言えば、こうした作用が、逆に科挙のすそ野を支え、「朱子学」を支える社会的基盤を形成することになるという検討課題が立ち現れた。

③　「地域講学から王朝の学びへ―「学」としての朱子学の形成をめぐって―」では、①の成果をうけて、朱熹の跋文に表された朱熹における「地域」に生きる士人としての心性が「理一分殊」論テキストとして朱子学理論に組みこまれるしくみについて論じ、また②で取り上げた「為己之学」論が朱門に対し、学説を自身の思想として読むべきことを促したであろうことを論じ、朱熹思想が「朱子学」に変化する転換点を概略的に考察した。

④　「すれちがう言葉―羅欽順の陽明学像―」では、形成された「朱子学」の明代におけ

る像として、羅欽順の言説を王守仁の陽明心学の言葉と比較し、上記、朱子学言説の解説説明語的なその特質のあらわれを解明した。

⑤「中国における中庸注釈の展開―東アジア海域文化交流からみる―」は、上述の東アジア文化交流全体を捉える「理念文化」論の視点に関する論であり、後者は日本への伝播を射程に置きつつ、中国における『中庸』論の展開についてその視点から追ったものである。

⑥ 訳注「朱熹『朱文公文集』跋文訳注稿」は、朱熹の思想のみならず、その芸術観念や士大夫の日常的交遊の様態などが朱熹跋文資料にうかがえ、南宋士大夫の思想・心性と文化意識を探るのに有用な一級資料であることから、その訳出と各条の研究的意義について検討し続けているものである。その検討内容は本課題研究副題の「南宋後期における士大夫思想展開の発展的研究」に資するものである。

(2)今後の展望：

当初の計画には、本研究の企画からすると不可欠の課題として朱熹再伝人士を論じる予定があったが、これは「朱熹再伝人士の位置」として発表準備中である。本研究は、平成14-17年度科研費補助金(基盤(C)(2))研究「南宋後期における「朱子学」形成の基礎的研究」を継ぐものである。準備中の上記論文、及び前回のこの科研費補助金(基盤(C)(2))研究の成果を併せて研究をまとまりのあるものにし、単著として刊行することを計画している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文（分担執筆を含む)〕（計６件）

① 市來津由彦、地域講学から王朝の学びへ―「学」としての朱子学の形成をめぐって―、伊原弘編『中国宋代の地域像―専制国家と地域―』岩田書院、査読無、2013（印刷中）、pp. 179-208

② 市來津由彦、すれちがう言葉―羅欽順の陽明学像―、吉田公平教授退休記念論文集刊行会編『哲学資源としての中国思想』研文出版、査読無、2013、pp. 92-115

③ 市來津由彦、朱熹、湯浅邦弘編『名言で読み解く中国の思想家』ミネルヴァ書房、査読無、2012、pp. 245-273

④ 市來津由彦、中国における中庸注釈の展開―東アジア海域文化交流からみる―、市來津由彦他編『江戸儒学の中庸注釈』汲古書院、査読無、2012、pp. 203－220

⑤ 市來津由彦、朱熹の四書注釈における「解説」的言辞の特質とその形成、東洋古典学研究、査読無、第32集、2011、pp. 25-47（※中国語版→朱熹四書集注中解説語的措詞的形成（韋佳訳）、陳来・朱傑人主編『人文与価値-朱子学国際学術研討会暨朱子誕辰880周年紀年会論文集』華東師範大学出版社、査読無、2011、pp. 490-503）

⑥ 市來津由彦、朱熹門人従其師那里得到了什麽―黄榦所“表象”的学習（陳貞竹訳、呉震校訳）、呉震主編『宋代新儒学的精神世界―以朱子学為中心』華東師範大学出版社、査読無、2009、pp. 187-200

〔訳注その他〕（計６件）

① 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文訳注稿（十一）、東洋古典学研究、査読無、第34集、2012、pp. 129-144

② 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文訳注稿（十）、東洋古典学研究、査読無、第30集、2010、pp. 217-235

③ 市來津由彦、儒教思想研究(学界展望)、遠藤隆俊他篇『日本宋史研究の現状と課題』汲古書院、査読無、2010、pp. 175-211

④ 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文訳注稿（九）、東洋古典学研究、査読無、第29集、2010、pp. 203-220

⑤ 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文訳注稿（八）、東洋古典学研究、査読無、第28集、2009、pp. 199-218

⑥ 市來津由彦、朱熹『朱文公文集』跋文訳

注稿（七）、東洋古典学研究、査読無、第27集、2009、pp.167-185

〔学会発表〕（計１件）

① 市來津由彦、朱熹四書集注中解説語措詞的形成、人文与価値：朱子学国際学術研討会―暨朱子誕辰880周年紀年会、清華大学国学院・華東師範大学出版社・華東師範大学古籍研究所主催、2010.10.19-21、中国北京・西郊賓館

〔図書〕（計１件）

① 市來津由彦・中村春作・田尻祐一郎・前田勉編、汲古書院、江戸儒学の中庸注釈、2012、総337頁（共編著。pp.ⅲ-ⅹⅳ, pp.5-26, pp.249-270）

〔その他〕なし

６．研究組織

(1)研究代表者

市來　津由彦（ICHIKI TSUYUHIKO）

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：３０１４２８９７

(2)研究分担者

なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

なし　　（　　）

研究者番号：